

Newsletter

2010.3.31

立教大学全学共通
カリキュラム運営センター



2010 年度言語教育科目カリキュラム改革

谷野典之 (言語教育科目構想・運営チームリーダー／異文化コミュニケーション学部教授)
 高山一郎 (英語教育研究室室員／異文化コミュニケーション学部教授)
 実松克義 (英語教育研究室室員／異文化コミュニケーション学部教授)
 佐藤邦彦 (スペイン語教育研究室主任／異文化コミュニケーション学部教授)
 池田伸子 (日本語教育研究室主任／異文化コミュニケーション学部教授)

I 2010 年度言語教育科目カリキュラム改革のねらい

2010 年度、すなわちこの4月から全カリ言語科目は大転換を遂げることになる。1997 年4月全カリ発足以来、途中 2006 年度にカリキュラム改訂が行なわれはしたものの、この12年間というもの全カリ言語科目は英語が必修8単位、言語Bが必修6単位(文学部のみ8単位)という大枠を維持してきた。2010 年度カリキュラムではその必修枠を英語6単位、言語B4単位に変更するとともに、必修科目修了後から卒業時まで一貫した学習を継続できる言語副専攻をスタートさせる。それと同時に、英語教育の徹底した少人数化を進め、必修科目のカリキュラムを刷新したのである。このカリキュラム改革の実現までには、全学的な多くの議論が戦わされ、関連する教職員の献身的な努力が費やされてきた。その序奏は2005年にさかのぼる。

2005 年度第5回部長会において、総長から「全カリ第2ステージ」のあり方についての諮問があり、それを受けるかたちで『全カリ第2ステージ』構想プロジェクトが立ち上げられた。17回の会議を経て、その答申が2005年11月9日付で提出された。

プロジェクトでは9項目にわたって全カリ第2ステージの実現に必要な問題を検討し、言語教育

については英語と初習言語の教育目標を実質化するために必修単位数を英語6単位、言語B4単位とし、その上で英語教育の少人数化によって教育内容の充実をはかり、同時に必修修了後により高度な言語学習の場を提供することが必要であると結論づけたのである。この答申は多くの議論を喚起し、賛否両論渦巻くなかで全カリを取り巻く学内情勢は一気に流動化していった。

今では我々になじみ深い全カリも、もともとは大学設置基準の大綱化という大波を受けて、激しい議論と可能性の模索のなかから産み出されたものである。その黎明期には、いつ果てるとも知れぬ耐久レースのような会議を重ね、意見をぶつけ合うのが全カリの姿であった。それがいつしか制度の安定とともに、全カリ自体がなにかを産み出す装置という機能から、むしろカリキュラムを運営する機能へと変化してきていた。おそらくそれが成熟というものなのだろう。一度成立して動き出したシステムを刷新するには、それなりの起爆剤が必要とされたことも確かである。

全カリは再び議論の季節を迎え、多くの可能性と実現性の間で議論と検討が重ねられた。その結果が、ようやくこの4月から起動するのである。その内容を英語、言語B、日本語のそれぞれについて見ていただこう。

(谷野典之)

目次

2010 年度言語教育科目カリキュラム改革のねらい	谷野典之 (1)
英語カリキュラム	高山一郎・実松克義 (2)
言語Bカリキュラム	佐藤邦彦 (6)
日本語カリキュラム	池田伸子 (9)
2009 年度全学共通カリキュラム運営センターの主な活動	(10)
2009 年度全学共通カリキュラム運営センター 名簿一覧	(12)

II 英語カリキュラム

1 英語必修カリキュラム

(1) 全カリ英語のあゆみ

英語教育研究室では、1997年度に全学共通カリキュラムを立ち上げて以来、統一シラバスによる、異文化理解とコミュニケーション能力、特に発信能力を重視した教育を展開してきた。英語での授業、プレイスメントテストによる能力別クラス編成、週2回同じクラスを同じ教員が担当するペアクラスなどは画期的な試みであった。当初は2コース制をとり、異文化理解を重視する LCC (Language and Culture Course) と発信能力を重視する COC (Communicative Course) の2つから学生は1つを選択できるようになっていた。しかし、カリキュラムを運営する過程で、この2つの要素はすべての学生に必要であるという認識が強まり、2006年度のカリキュラム改革では、2つのコースは特徴を残しつつ、お互いにかなり似たものになっていった。例えば、COC と LCC の一部のみで開講されていたライティングの授業は、両方のコースで開講されるようになった。また、効率的なリーディングとリスニングの訓練のため PC を利用した授業が両方のコースで必修となった。2007年度には2010年度から英語の必修単位を現行の8単位から6単位へと変更することが決定され、これを受けて英語教育研究室では、少人数クラスを核とする新たな英語必修カリキュラムを設定することになった。

(2) 英語必修科目の目標

現代社会においては、変化の激しい世界の状況を正しく認識していく力と、各自が生まれ育った文化や社会環境を正確に受け止め、それらを基にして自らの意見を積極的に発信していく能力が必要とされる。さらに、さまざまな分野でグローバ

ル化が進行している中、世界に広がる多様な文化を偏見のない視線で分析して受容する力を培うことが要求されている。英語必修科目では、このようなグローバル社会に対応した総合的かつバランスのとれたコミュニケーション能力を育成することを目的としている。

英語必修科目を学び、英語で社会や異文化に関する情報を得、話し合い、考え、発信する方法を学びながら偏りのない英語運用能力を身につけると同時に、現代社会の情勢や異文化を批判的かつ多角的に理解し、自分の考えを発信する能力を身につけていくことが期待される。

(3) 必修カリキュラム内容と特徴

2010年度より開始される新しい英語カリキュラムではいままでの2コース制が廃止される。英語ディスカッションと英語プレゼンテーションは前後期両方で開講され、英語ライティングと英語eラーニングの授業は各学期半数ずつの学生が履修する。

さらに、PCを使った英語eラーニング(160名程度)を除くすべてのクラスを少人数にする。英語プレゼンテーションと英語ライティングは20名程度、英語ディスカッションは極少人数の8名程度で行う。英語の必修単位が8単位から6単位になり、学生の英語力が多様化している状況で、前述の教育目標を達成するには思い切った少人数化が必要であると考えたからである。これにより、きめの細かい指導が可能となり、一人ひとりの学生に目が行き届くはずである。

入学時、前期末、後期末に実施されるウェブによる能力判定テストは、学生が自分自身の英語力の伸びを把握するとともに、能力別クラス編成に利用する。今までと同様、レベルはS、A、Bの3レベルを設ける。

この4種類の授業により4技能(スピーキング、リスニング、ライティング、リーディング)をす

英語必修カリキュラム

パターン A	前期	英語ディスカッション 8	英語プレゼンテーション 20	英語ライティング 20
	後期	英語ディスカッション 8	英語プレゼンテーション 20	英語eラーニング 160
パターン B	前期	英語ディスカッション 8	英語プレゼンテーション 20	英語eラーニング 160
	後期	英語ディスカッション 8	英語プレゼンテーション 20	英語ライティング 20

*各クラスにS.A.Bのレベルがある * は共通トピック

べてカバーし、英語で他者の意見を聞き、自分の意見をしっかり表現できるような能力を養成し、異文化理解を促進し、視野を広げ、社会・国際問題についての認識を深めることを目標としている。英語eラーニングを除くすべての授業は原則として英語で行われ、リーディングの課題があたえられることとなっており、リスニングとリーディングの要素も十分カバーされている。

(4) 開講科目について英語eラーニング

PCを利用した授業では個々の学生に発信型英語力の基礎となるリーディング力とリスニング力の強化をおこなう。コンピュータ教室でウェブ教材を利用し、一斉授業と個人作業を組み合わせながら進める。一斉授業では、教員が指定した箇所の学習を一斉に行った後に、小テストなどで理解度・定着度などを確認していく。また、個人作業においては、各自が自分のペースで自分に最適なユニットを学習する。さらにインターネットを利用してどこからでもアクセス可能なため、授業時間外でも、単語、文法、リーディング、リスニングなどの学習をすることができ、日常的な英語学習習慣を形成することで学生の自律性を高める。

英語プレゼンテーション

最終的にプレゼンテーションをすることを目標に、リーディングやリスニング、語彙力など英語の総合的な運用能力の向上を目指す。英語プレゼンテーションのスキルとしては、スピーチの構成法、焦点の絞り方、視覚資料の使い方、数値・統計の示し方、アイコンタクト、ジェスチャーなどの効果的な使い方を学び、授業の様々な活動を通じて練習する。学生は授業の前に、ディスカッションの授業で扱われるテーマについて英文を読んだり、自分でリサーチをしてくる。授業ではこれについてペアやグループで要約する、紹介するなどの簡単なプレゼンテーションの練習を行う、さらに教員のミニ・レクチャーやクラスメートとの話し合いを通して、問題を客観的に分析してまとめ、論理的に自分の意見を表現し、多くの人を対象に口頭で発表できるようにする。

英語ライティング

発信型英語の基礎となる英語表現能力の基礎を固め、その上で応用力を向上させていくことを目標とする。パラグラフの概念を理解して基本的な英語を使ってパラグラフが書けるようになること、身の回りの話題や興味のある事象を対象として簡単なエッセーを書けるようになること、リサーチペーパーなど論理的でアカデミックなペーパーが書けるようになることなどレベルに応じた目標を設定する。担当教員からの頻繁なフィードバックをもとに、学期末には指定された語数のレポートを完成させる。正確な英文作成に不可欠な文法力の向上の課題にも取り組む。また、ライティングの基本的規則を身につける。具体的には、手紙・E-mail等の作法、レポートや小論文などの章立てや引用の仕方などを学ぶ。

英語ディスカッション

英語ディスカッションでは、学生に話す機会を

保証し、いままで蓄積した「知識」を実際の場面で使えるようにする。これは、これまでのような大人数のクラスでは実現が難しかった点である。

1クラス8名程度とした理由は、発言の機会が多いと同時に、多様な意見が交換されるのに適切であると考えられるからである。教員の講義からではなく、クラスメートから情報を得て、意見を交換し、話す力をつけるというのがこの授業の特徴である。

テーマは「教育」「社会問題」「環境」「メディア」「ジェンダー」「人権」などの社会問題をとりあげているが、学生の身近な興味からスタートし、いろいろな練習を通して最終的には学生が自分たちだけでディスカッションができるようする。学生はディスカッションに必要な表現や方法を毎回学び、練習を重ねる。

発信力を身につけると同時に、社会や文化について考える機会をあたえる。さらに、これらのテーマはプレゼンテーションの授業でも扱われ、さらに考察や知識が深化すると期待される。

この授業の特徴の一つが、学期中に3回実施され、評価の35%をしめるディスカッションテストである。与えられたテーマについて、4名のグループで15分間ディスカッションを行う。その際には、今まで学んだ表現が使われているか、上手くコミュニケーションができてきているか、内容が充実しているかなどの基準で評価する。このようなテストは他にはない試みであると考えられる。

(高山一郎)

2 言語副専攻 (英語)

本学の全学共通英語カリキュラムは、2010年度から根本的に刷新されることになるが、より効果的に学生のニーズに応えるためには、2年次以降も学生が継続して学べる環境、優れたカリキュラムを用意する必要がある。そうした目的を持って新たに構想されたのが言語副専攻である。

言語副専攻は、現行の英語自由選択科目の発展形である。これらの自由選択科目群は2年次以降の英語教育の象徴であるが、その不十分さへの反省に端を発し、その後2年以上にわたる議論を経て、カリキュラムの全面的な改訂に至ったものである。言語副専攻のカリキュラムは2011年度より始まるが、このカリキュラムの導入により、本学の学生は1年次必修科目修了後も、継続して高度な英語教育を受けることが保証される。以下、別表のチャートを見ながら、カリキュラムの概要をスケッチしてみよう。

1年次英語必修科目をステージ1とすれば、副専攻カリキュラムはステージ2、3、そして4から成り立っている。ステージ2はカリキュラムの核に当たり、インテンシブ・コースとインディペンデント・コースの2つから構成される。インテンシブ・コースは2学期、1年課程(合計16単位)のカリキュラムであるが、Global World, Academic Language Skills, Integrated Language Skills, Intercultural Understandingの4種類のクラスがある。高度で集中的なカリキュラムであり、本格

2010年度以降 英語カリキュラム

ステージ	ステージ1		ステージ2	ステージ3	ステージ4
カリキュラム	英語必修科目		自由科目 言語副専攻(英語) *選択		
履修年次	1年次前期	1年次後期	2年次~4年次		
コース・科目名	英語プレゼンテーション1 (1) 英語ディスカッション1 (1) 英語ライティング (1) または 英語 eラーニング (1)	英語プレゼンテーション2 (1) 英語ディスカッション2 (1) 英語ライティング (1) または 英語 eラーニング (1)	基準点あり インテンシブ・コース (16) インディペンデント・コース (16) *英語海外文化研修含む	基準点あり アドバンスト・コース (8) *留学認定科目含む	オナーズ・コース (8)

() 内の数字は単位数

的な英語力の涵養を目指す、学期（8単位）ごとの履修も可能である。これと対照的に、インディペンデント・コースはより自由な履修を可能にしたもので、バラエティに富む科目群を持つ。一般英語スキル科目群、コミュニケーション科目群、アカデミック・セミナー科目群、時事英語科目群、教養としての英語科目群、TOEFL 科目群、TOEIC 科目群、そして専門学部提供科目群である。学生はこれらの中から自らの目的と時間に合わせて必要な科目を履修することができる。

インテンシブ・コース、インディペンデント・コース両方とも、16単位を修了すれば、更に上位のステージ3、アドバンスト・コースに進むことができる。これは8単位のコースであるが、より高度な英語レベルのカリキュラムである。Lecture & Discussion 等の科目群がある。アドバンスト・コースの目的はプロフェッショナルな英語力の養成であり、第一に、英語圏大学への留学準備を目的としている。最後に、更なる上位コースとしてステージ4、オナーズ・コースがある。これは極めて高度な英語力の涵養と維持を目的としたカリキュラムである。

言語副専攻はこれまでの自由選択科目にはなかった多くの特筆すべき特徴を持っている。まず、言語副専攻最大の特徴は、1年次から4年次まで、4年間の英語継続学習を可能にするカリキュラムであると言える。ステージ2～4の多様な科目群は系統的に、また段階的に配置されており、これにより学生は自らの目的とニーズに合わせて基礎的な科目から高度な科目までを継続して履修することが可能となる。また極めて優秀な英語力を持つ学生は TOFEL、TOEIC 等の公式スコアを提出することにより、1年次英語必修科目の履修を免除（2011年度以降を予定）され、スキップして、ステージ2、あるいは3を履修することができる。

また学生の履修動機を高めるための様々な工夫がなされている。たとえばカリキュラムの各段階

を修了した学生には修了証が授与されることになっている。更に科目単位数も倍増された。これまでの全学共通カリキュラム英語科目は1コマ（授業時間）につき1単位であった。それが専門科目と同じく2単位扱いとされる。これは言語副専攻科目が、内容的にも高度であり、また学生の負担の面からも、専門科目と同等だと見なされたからである。またこれに関連して、各学部は英語関係の諸科目を言語副専攻の対象科目として提供することになった。これにより英語と専門科目との有機的な連携が実現することになった。

以上でわかるように、言語副専攻は、これまでの自由選択科目の抜本的な改革を狙ったものである。またこのカリキュラムの実現によって、1997年度に発足した全学共通カリキュラムが目指したりベラルアーツ教育が一少なくとも言語教育の次元で一実現することになる。その意味で意義あるものであり、本学における英語教育の進化の里程を表すものであると言えよう。

しかしこのカリキュラムの実施に際しては、まったく問題がないわけでもない。一つは各学部の定める履修登録上限単位数の存在である。これは学生の勉学の質を確保するために設けられた制度であるが、インテンシブ・コースを履修する際の障害となりうる。つまり学生は英語を本格的に集中して学びたくても、単位数がオーバーしてしまうため、履修できなくなる可能性があるのだ。もう一つは組織的サポートの問題である。言語副専攻のカリキュラムを本格的に展開するには、海外留学を始めとして、多方面の教育機関との連携と協力、また充実した事務組織が必要になると思われる。本学のすべてがこのカリキュラムの意義を認めてこれらの問題に迅速に対応し、真の意味での言語副専攻が実現することを切に祈るものである。

（実松克義）

Ⅲ 言語Bカリキュラム

はじめに

全カリは発足以来、様々な見直しを行いながら現在に至っているが、今回の制度改変はこれまでで最大のものとなる。言語Bに関して言えば、必修が1年次科目の4単位のみになる点が最も大きな変化で、これに伴い、意欲のある学生の継続学習の場を整備するための「言語副専攻」も2010年度入学者から本格的に適用される。こうした変革について、その概要を述べてみたい。(本稿では「言語B」と言った場合、日本語を除く言語B科目を指すことをあらかじめお断りしておく。)

1 必修6単位から4単位へ

従来の言語B必修は、1年次科目4単位、2年次科目2単位の計6単位であった(文学部を除く)。言語によって、微妙な差異があると思うので一概には言えないが、大雑把には、1年次で初級文法の最重要部分ひとつとおりと、最低限のコミュニケーション等を学び、2年次ではその補充をしつつ、より高度な言語能力を身につけ、当該言語の背景にある文化や社会についても学ぶ、という展開であったと言える。それを1年次のみを必修にした場合、その言語の運用能力の基礎や、異文化対応力を十分に身につけることが出来るのか、という疑問は当然起こり得る。

しかしながら、必修4単位化は単純な数量の上での削減ではなく、教育目標やその内容の再編も含めたものである点に注意したい。

(1) 必修としての必要性

従来の2年次必修は、いわば中級レベルだが、その言語をある程度本格的に使いこなせる能力という点から言えば、この中級程度までの学習は不可欠だとも言える。一方、立教大学の学士課程教

育を終えた者に最低限身につけておいて欲しいレベル、という意味での「必修」として考えた場合、必ずしも全員に言語Bの中級レベルを強制する必要があるのか、という見方も出来る。新カリキュラムの必修はむしろ、その言語の最も初歩的な部分とそれを使う能力を確実に身につけることを目標とし、中級またはそれ以上の学習へ進みたい学生のために自由科目を整備するというコンセプトの上に成り立っていると見える。

(2) レベル設定に関する考え方

これまでは必修に1年次、2年次の二段階があることを前提に、「1年次必修で初級の学習をひとつとおりやるので、その後2年次必修ではどんな事を学べる…」という「積み上げ」の発想であった。新カリキュラムではこの「積み上げ」の前提が違ったものになっている点も重要だと思う。

実際の学習プロセスが下からの「積み上げ」になるのはもちろんだが、必修のレベル設定には、これと逆の発想も必要である。必修修了後も自由科目という形で、その言語を卒業まで続けて学んだ場合、どの程度のレベルに達することを目標とするか。ここから逆算して、自由科目にどのような段階設定を与えるか。そして、こうした継続学習に進む人のためにも、必修段階でどの程度の最低ラインを保証するのが妥当か…というように、先のステップを想定してから逆算して考えることも重要である。理想的にはそういうことだが、具体的には次に述べるように、1年次必修4単位の中身に関わってくることである。

(3) 必修4単位で何を・どう学ぶか

カリキュラム制度に合わせて、学習対象となる言語が変わってくれるわけではないので、初級文法の重要ポイントなど、その言語の学習の根幹をなす部分は大きく変えようがないのも事実である。では、新カリキュラムでの1年次必修はどう変わ

らなくてはならないのか？

これまでは、応用的な学習は2年次でやることを前提にして、1年次では文法などの初歩の学習を比較的型通りの方法でこなすことに集中できた。ところで、覚えるべき文法事項や語彙といった、表向きの言語知識は同じであっても、それを使って何をするかによって、言語の「運用能力」の達成度は違って来る。新カリキュラムでは、表向きの学習範囲は従来と基本的に同じであっても、「必修レベルを修了したからにはこれぐらいは使えます」と言えるような、内容の充実化が期待される。一例を挙げると、次々に規則や語彙を覚えて型通りの練習問題等で確認していくという学習だけではなく、既習事項を随時、表現やコミュニケーションといった実践面に応用しながら学んでいく、といった方法を導入するなどの工夫が考えられる。

この点、言語によって細かな差異はあるだろうが、教材の選定やその利用方法、授業方法などに関して、これまで各言語教育研究室で検討を続けてきている。

ちなみに、2008年度新設された学部・学科に関しては、同年度より、1年次4単位のみを必修とする新制度が適用されている。

2 継続学習システムとしての「言語副専攻」 (言語B)

必修は1年次科目のみとなったが、一方で、「ある程度本格的に話せるようになりたい」「文献を

原書で読めるようになりたい」といった目標を持った学生も一定数存在するのも事実である。そういう学生のために、継続学習のための自由科目の整備も検討されてきた。

従来の自由選択科目も、レベルや学習内容の多様性を考慮して設置されてはいたが、自由選択科目全体としては必ずしも系統立った形になっていなかった。その点、新カリキュラム移行に向けての検討の中で、レベル設定と、言語のどのスキルに重点を置くかを明確にした自由科目の整備が講じられてきたが、この議論の当初から「言語副専攻」制度の立ち上げが念頭に置かれていた。実質的にはむしろ、言語副専攻の構築を念頭に、自由科目の系統立てがなされた、と言ってよい。

言語副専攻は、必修修了後の継続学習において所定の水準まで到達した学生に対して、「〇〇語副専攻修了」という認定を与えるものである。言語副専攻に含まれる科目は自由科目であるが、新カリキュラム下での言語B自由科目は、言語副専攻を念頭に、レベルやスキルの別に関して組織的に組まれている。学生は、これらをあくまでも自由科目として単発的に履修することも可能だが、後述するような条件を満たした場合には、副専攻修了認定の対象となる。

言語副専攻は、次の3つの科目カテゴリーからなる。

① 基礎科目

中級レベルの科目。週2回展開でコミュニケー

2010年度以降 言語Bカリキュラム

スキル科目	言語B必修科目		自由科目 言語副専攻 (スキル科目12単位+関連科目4単位=16単位)			
	1年次前期	1年次後期	①基礎科目 (4単位)		②コア科目 (8単位)	
			(2年次) 前期	(2年次) 後期	(3~4年次) 前期	(3~4年次) 後期
~語基礎1 (2)	~語基礎2 (2)	~語中級1 (2)	~語中級2 (2)	上級~語コミュニケーション1 (2)	上級~語コミュニケーション2 (2)	
		~語スタンダード1 (1)	~語スタンダード3 (1)	上級~語ライティング1 (2)	上級~語ライティング2 (2)	
		~語スタンダード2 (1)	~語スタンダード4 (1)	上級~語リスニング・リーディング1 (2)	上級~語リスニング・リーディング2 (2)	
		~語海外言語文化研修・中級 (2) *夏期 (集中)		上級~語演習1 (2)	上級~語演習2 (2)	
③関連科目 (4単位)	全カリ総合科目 (2~4単位)	~語圏の文化 (2) ~語圏の社会 (2)				
	その他指定された科目 (0~2単位)	~語情報処理 (1)、学部展開科目 (予定) など				

() 内の数字は単位数

ション能力に重点を置いた「～語中級」(2単位)と、週1回展開でゆとりを持って総合的に学ぶ「～語スタンダード」(1単位)がある。

② コア科目

上級レベルの科目で、1科目2単位。「上級～語コミュニケーション」「上級～語ライティング」「上級～語リスニング・リーディング」というスキル別の科目の他、テーマを設定してコンテンツ面にも重きを置いた学習を行う「～語演習」がある。

③ 関連科目

「～語情報処理」の他、全カリ総合教育科目として展開する講義科目である「～語圏の文化」「～語圏の社会」がある。

①は、②に進む前段階として、1年次必修修了者の基礎力の完成を目指すもの。②は、在学中の言語Bの学習としての最終目標レベルを目指すものである。③は、言語運用以外の面での知識を深めてもらうためのもの。

副専攻修了要件としては、①から4単位以上、②から8単位以上、③から4単位以上、計16単位の修得だが、①から4単位以上修得していない学生は原則として②の科目を履修できないことになっている。(ちなみに、後述の「海外言語文化研修」の「中級」の単位は上記①に、「上級」は②に読み込むことが可能。)

意欲のある学生には、出来れば卒業まで言語Bの学習を継続してもらいたいものだが、すべての単位が卒業要件単位にならない自由科目ということだと、どうしてもやる気が失せてしまう可能性がある。そこで修了認定というタイトルを設けることで、意欲を持続してもらおうというのが、言語副専攻の狙いである。

ちなみに、この「言語副専攻」は、すでに2008年度より「インテンシブ」という名前で部分的に導入されている。もっとも、新カリキュラムへの

移行期の試験的導入ということで、設置科目数やクラス数に関してフルスペックではない。それが2010年度以降の入学者を対象に本格的に導入されることになるのだが、2010年度に中級以上の言語副専攻科目を履修する可能性があるのは、1年次必修を免除になった既習者のみであるため、フルスペック展開は実際には2011年度からということになる。

3 海外言語文化研修

これまで言語Bの中で、海外への学生の派遣を正規科目として実施していたのは、中国語と朝鮮語のみであった。しかし、2010年度からはドイツ語・フランス語・スペイン語でも実施される。

夏期集中で現地校の語学研修プログラムに参加し、現地教員のみによる授業を受け、現地滞在中で言語の実践使用を経験し、文化・社会について学ぶ機会も持つ。学生が参加するクラスレベルは派遣先でのレベル分けによるが、立教大学の科目としては「中級」「上級」の2つが設置される。

おわりに

必修4単位化は、立教生全員に共通して要求されるレベルを再設定し、中級以上の学習に「言語副専攻」という新制度を導入した、ある意味思い切った改革である。必修科目の展開にしろ、言語副専攻にしろ、海外言語文化研修にしろ、2010年度新カリキュラムは新しい試みがめじろ押しである。これまでの私達教員の検討の成果が、そして新カリキュラム発足後の不断の努力が、問われることになる。

(佐藤邦彦)

IV 日本語カリキュラム

新学部・新学科の設置や独立大学院の設置などにより、本学で学ぶ留学生の日本語学習に対するニーズは多様化している。さらに、本学が推進している様々な国際化戦略が実現できれば、より一層多様な留学生が本学で学ぶことになる。

このような流れの中で、現在そして将来の留学生ニーズの多様化に対応可能な日本語カリキュラムを設計することは、日本語教育研究室の喫緊の課題であったが、2010年度より適用される新カリキュラムにおいて、それが実現されることとなったので、具体的な改革の要点を以下に報告する。

1 正規学部留学生の言語B（必修）選択の自由化

本学の学部留学生の日本語能力にはばらつきがあり、かなり日本語能力の高い学生がいるにも関わらず、学部留学生は言語Bとして日本語を選択しなければいけなかった。しかし、2010年度以降は、留学生も日本人学生同様、母語を除く展開言語の中から自由に言語Bを選択できるようになる。この改革により、留学生の言語科目学習に対するモチベーションは高くなり、さらに、彼らが感じている不平等感も解消できる。

2 正規学部留学生の自由科目履修制限の緩和

これまでの履修ルールでは、日本語の履修免除試験に合格した学生以外は、2年次以上にならないと日本語の自由科目を履修することができなかった。しかし、2010年度からは、すべての学部留

学生が必要に応じて1年次から日本語の自由科目を履修できるようになる。これによって、留学生が必要を感じたときに、必要な内容の日本語支援を受けられることになる。

3 自由科目の充実

2010年度以降は、日本語自由科目を22コマ（池袋16、新座6）展開し、これまでの6コマ展開（池袋4、新座2）では実現できなかった多様な自由科目を提供する。留学生の中には、日本の企業で就職したいという希望を持つ学生も少なくないため、就職活動やビジネス日本語の科目を提供し、そのような学生のニーズに応える。また、論文作成や論文読解科目を提供することにより、留学生の大学生活をより一層支援することが可能になる。

4 大学院留学生等に対する日本語科目の提供

これまで日本語の自由科目を履修することができなかった大学院留学生に対して、2010年度以降、自由科目の履修を認める（プレイスメントテスト受験必須）。この改革によって、これまで日本語学習のニーズを抱えながら、その機会を得られなかった大学院留学生に、日本語学習の機会を提供できるようになる。また、正規学部留学生、正規大学院留学生以外の資格で本学学生として学んでいる留学生に対しても、自由科目の履修を認める（プレイスメントテスト受験必須）ことによって、全学共通カリキュラムの役割である「本学で学ぶすべての学生」を対象とした日本語科目の提供が可能となる。

（池田伸子）

2010年度以降 日本語カリキュラム

日本語	1年次		1～4年次	
	必修科目		自由科目	
	日本語基礎 1 (2)	日本語基礎 2 (2)	●日本の文化・社会A/B (1) ●日本語論文作成法 (1) ●就職活動の日本語 (1) ●ビジネス日本語 (口頭) (1)	●日本語の諸相A/B (1) ●日本語論文読解 (1) ●就職試験の日本語 (1) ●ビジネス日本語 (文書) (1)

() 内の数字は単位数

2009年度 全学共通カリキュラム運営センターの主な活動

<言語教育科目構想・運営チーム>

①英語教育研究室

- ・4月4日(土) 新任オリエンテーション
(池) 5号館 5124教室 15:00~17:00
- ・6月27日(土) 前期FDセミナー
(池) 14号館 D401教室 13:00~16:00
- ・7月2日(木) ~15日(水) 前期カリキュラムアンケート(コースアンケート) 実施
実施数:129クラス
- ・12月5日(土) 第10回大柴杯スピーチコンテスト (池) 11号館 AB01教室
- ・12月12日(土) 後期FDセミナー
(池) 9号館 大教室 13:00~16:00
- ・12月16日(水) ~22日(火)、1月9日(土) ~18日(月) 後期カリキュラムアンケート(コースアンケート) 実施
実施数:120クラス
- ・英語ウェブテスト(GTEC) 実施
4月期(プレースメントテスト)
9月期(前期末)・1月期(後期末)

②ドイツ語教育研究室

- ・7月23日(木) 前期担当者連絡会
(池) 11号館 A201教室 16:30~18:00
- ・2月19日(金) 後期担当者連絡会
(池) 12号館 2階会議室 16:30~18:00

③フランス語教育研究室

- ・6月26日(金) 前期担当者連絡会
(池) 10号館 X201教室 17:00~19:00
- ・12月7日(月) 後期担当者連絡会
(池) 10号館 X106教室 17:00~19:30

④スペイン語教育研究室

- ・7月31日(金) 前期担当者連絡会
(池) 12号館 2階会議室 18:30~21:00

- ・1月28日(木) 後期担当者連絡会
(池) 13号館会議室 18:30~20:30

⑤中国語教育研究室

- ・7月25日(土) 前期担当者連絡会
(池) 12号館 2階会議室 15:00~17:30
- ・同日 FDセミナー
「自主的な課外学習を促す授業の工夫
- 授業の活性化と学習効果の向上 -」
- ・1月30日(土) 後期担当者連絡会
(池) 太刀川記念館多目的ホール
15:00~17:30
- ・同日 FDセミナー
「1年次必修科目『基礎中国語』新テキスト
をより活用する教授法」

⑥諸言語教育研究室

- ・7月23日(水) 前期担当者連絡会(朝鮮語)
(池) 5号館第2会議室 17:00~19:00
- ・1月15日(金) 後期担当者連絡会(朝鮮語)
(池) 5号館第2会議室 17:00~19:00

⑦日本語教育研究室

- ・8月3日(月) 前期担当者連絡会
(J4、J5レベルクラス担当者対象)
(池) 6号館第1会議室 10:00~13:00
- ・8月3日(月) 前期担当者連絡会
(J0~J3レベルクラス担当者対象)
(池) 6号館第1会議室 17:00~20:00
- ・3月10日(水) 後期担当者連絡会
(J4、J5レベルクラス担当者対象)
(池) 11号館会議室 10:00~13:00
- ・3月12日(金) 後期担当者連絡会
(J0~J3レベルクラス担当者対象)
(池) 11号館会議室 10:00~18:00

<総合教育科目構想・運営チーム>

- ・7月24日(金) 前期担当者連絡会
(池) 11号館2階 A204 教室 17:00~19:00
- ・10月16日(金) 2012年度カリキュラム改革に向けた授業見学会
参加: 総合チームミーティング出席者
- ・11月27日(金) 2009・2010年度「立教生の学び方」担当者連絡会(テレビ会議)
(池) 12号館第1会議室、(新) 7号館2階会議室 18:10~19:30
- ・2月19日(金) 第1回2010年度担当者連絡会
(池) 11号館2階 A204 教室 17:00~19:00

<2010年度新任教員対象オリエンテーション>

- ・4月9日(木)・10日(金)
人事課主催オリエンテーション
「全カリについて」の説明: 山口和範全カリ部長
- ・3月31日(火)
ランゲージ・センター主催オリエンテーション
(新任教育講師対象)
谷野典之言語教育科目担当部会長(現言語教育科目構想・運営チームリーダー) 出席

<授業評価アンケート関連>

①言語教育科目構想・運営チーム

【2009年度「授業評価アンケート」関連】

- ・全カリ言語教育科目「授業評価アンケート」実施(2009年度後期開講科目対象)
12月16日(水)~22日(火)、1月9日(土)~18日(月) 実施科目数: 257科目

【「授業評価アンケート報告書」関連】

- ・「全学共通カリキュラム言語教育科目授業評価アンケート(2006年度後期~2008年度後期実施分)」作成(2010年3月刊行)

②総合教育科目構想・運営チーム

【2008年度「学生による授業評価アンケート」関連】

- ・2008年度「学生による授業評価アンケート」学部等総評の作成

【2009年度「学生による授業評価アンケート」関連】

- ・2009年度「学生による授業評価アンケート実施」実施科目数: 前期110科目、後期111科目、計221科目

- ・2009年度「学生による授業評価アンケート」グループ別集計の結果分析(前期・後期)

<シンポジウム>

テーマ: 「学士課程の科学教育—全カリ理系教育の未来」

日時: 2009年11月12日(木) 18:00~20:00

池袋キャンパス太刀川記念館多目的ホール
プログラム:

◆基調講演

長谷川 寿一 氏 東京大学大学院総合文化研究科教授、前東京大学教養学部副学部長、日本学術会議第一部会員

演題 「学士課程の質保証と教養としての科学教育—学術会議の議論から」

◆提言

北本 俊二 本学理学部教授

「理系の立場から期待する学士課程の科学教育」

佐々木 一也 本学文学部教授

「文系の立場から期待する学士課程の科学教育」

◆司会

上田 恵介 本学理学部教授、全学共通カリキュラム運営センター総合教育科目構想・運営チームメンバー

* 本シンポジウム筆録は「大学教育研究フォーラム第15号」に掲載

<学外対応>

- ・7月17日(金) 立命館大学教養教育センター来学
「全カリのカリキュラムおよび組織運営について」
- ・3月10日(水) 摂南大学全学FDフォーラム講演
「全学共通教養教育—立教大学全学共通カリキュラムの取組み—」青木康全カリ副部長

<学会・シンポジウム参加>

- ・11月28日(土)・29日(日)

大学教育学会課題研究集会「学士課程における教養教育再考」(大阪市立大学開催) 参加

青木康全カリ副部長・藤野裕介全カリ事務室課員

2009年度 全学共通カリキュラム運営センター 名簿一覧

2010. 3. 1現在

<全カリ委員会>

役職名	氏名	所属	
部長	山口 和範	営 営	
副部長	青木 康	文 史	
チーム	谷野 典之	異 異	言語チーム
リーダー	西原 廉太	文 キ	総合チーム
運営センター 委員	加藤 睦	文 文	文学部長
	郭 洋春	経 済	経済学部長
	佐藤 文広	理 数	理学部長
	間々田孝夫	社 現	社会学部長
	李 鍾元	法 政	法学部長
	豊田由貴夫	観 交	観光学部長
	橋本 正明	福 福	コミュニティ福祉学部長
	白石 典義	営 国	経営学部長
	前田 英樹	心 映	現代心理学部長
	一ノ瀬和夫	異 異	異文化 コミュニケーション学部長
家城 和夫	理 物	教務部長	

<言語教育科目構想・運営チーム>

役職名	氏名	所属	
リーダー	谷野 典之	異 異	
メンバー	高橋 里美	異 異	英語教育研究室主任
	浜崎 桂子	異 異	ドイツ語教育研究室主任
	小倉 和子	異 異	フランス語教育研究室主任
	佐藤 邦彦	異 異	スペイン語教育研究室主任
	細井 尚子	異 異	中国語教育研究室主任
	石坂 浩一	異 異	諸言語教育研究室主任
	池田 伸子	異 異	日本語教育研究室主任

<総合教育科目構想・運営チーム>

役職名	氏名	所属	
リーダー	西原 廉太	文 キ	
メンバー	平野 隆文	文 文	
	岩崎 俊夫	経 済	
	上田 恵介	理 生	
	原田 久	法 政	
	沼澤 秀雄	福 ス	

<言語教育研究室>

研究室名	主任	氏名	所属	
英 語	主任	高橋 里美	異 異	
		Allum, Paul H.	異 異	
		Caprio, Mark E.	異 異	
		Cousins, Steven E.	異 異	
		Cunningham, Paul A.	異 異	
		藤田 保	異 異	
		Glick, Christopher	異 異	
		小林 悦雄	異 異	
		森 聡美	異 異	
		師岡 淳也	異 異	
		灘光 洋子	異 異	
		佐竹 晶子	異 異	
		実松 克義	異 異	
		高山 一郎	異 異	
		鳥飼慎一郎	異 異	
		山田久美子	異 異	
		山口まり子	異 異	
		平賀 正子	異 異	
ドイツ語	主任	浜崎 桂子	異 異	
フランス語	主任	小倉 和子	異 異	
		石川 文也	異 異	
スペイン語	主任	佐藤 邦彦	異 異	
		飯島みどり	異 異	
中国語	主任	細井 尚子	異 異	
		谷野 典之	異 異	
		呉 悦	異 異	
諸言語	主任	石坂 浩一	異 異	
		イヒヤンジン	異 異	
		谷野 典之	異 異	
日本語	主任	池田 伸子	異 異	
		田中 望	異 異	

<総合チームサポーター>

	氏名	所属	グループ*
学部選出	田中 治彦	文 教	人文
	中島 俊克	経 済	社会
	原田 知広	理 物	自然・情報
	高橋 利枝	社 メ	社会
	早川 吉尚	法 国	社会
	佐藤 大祐	観 交	社会
	原田 晃樹	福 政	社会
	秋野 晶二	営 営	社会
	宇野 邦一	心 映	人文
	星野 宏美	異 異	人文
総長任命	竹原 創一	文 キ	人文
	大杉 英史	理 数	自然・情報
	漆山 秋雄	理 化	自然・情報
	山田 康之	理 生	自然・情報
	長島 忍	理 数	自然・情報
	黄 盛彬	社 メ	社会
	大石 和男	福 ス	スポーツ人間
	佐野 信子	福 ス	スポーツ人間
	Davis, Scott T.	営 国	社会
	大石 幸二	心 心	スポーツ人間
石坂 浩一	異 異	人文	

*サポートグループ

- 人文学系サポートグループ
- 社会科学系サポートグループ
- 自然・情報科学系サポートグループ
- スポーツ人間科学系サポートグループ

全カリニュースレター No.27
 印刷 2010.3.10 発行 2010.3.31
 発行人 山口 和範
 編集人 師岡 淳也、上田 恵介
 発行所 立教大学
 全学共通カリキュラム運営センター
 印刷 神谷印刷株式会社